## 琉球大学学術リポジトリ

## パパイヤの組織培養による苗生産

メタデータ	言語:
	出版者: 南方資源利用技術研究会
	公開日: 2014-10-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 上原, 周夫, 松田, 義昭, 濱井, 義則
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002017003

## パパイヤの組織培養による苗生産

北中城村農業開発(株) 〇上原周夫、松田義昭、 濱井義則

[目的] パパイヤはメキシコ、西インド諸島及びブラジルにまたがる熱帯アメリカ原産で、沖縄へは明治末期に導入され昭和63年度の栽培面積は 15.4ha となっている.

現在、野菜及び加工用を主体に栽培されているが最近の消費動向の変化、蒸 熱処理による本土出荷及び平成2年度沖縄県下ウリミバエ根絶の見通しにより 果実生産として見直しがなされ急速に栽培熱が高まっている。しかし、パパイ ヤの種苗生産は、自家採取及び導入種子の実生で行なっているため、性の変化、 果実の形質の変化があり形質、熟度の揃った果実を安定生産することができない

ここで当社では、果実の安定生産の前提条件となる優良種苗の供給体制の確 立を図るためパパイヤの組織培養による苗生産の開発を行なった。

[ 方法 ] 材料は、品種名 台農 1号 の 4ヶ月令苗を用い伸長中の先端部 3 c m を採取し滅菌後、生長点茎頂部 0.5~1.0 mm に葉原基 2~3 枚をつけ初代 培地 (BAを含むMS培地) に置床した。増殖は、節間を切断分割し増殖用培地 (2 i pを含むMS培地) に移植した。増殖個体は、伸長培地 (2 i pを含むMS培地) に移して発根個体を得た。すべての培養条件は 25℃、16 時間日長下で行なった。

順化は、培養容器から取り出し流水下で寒天を除去した後、バーミキュライトを詰めたビニールポットに鉢上げを行なった。

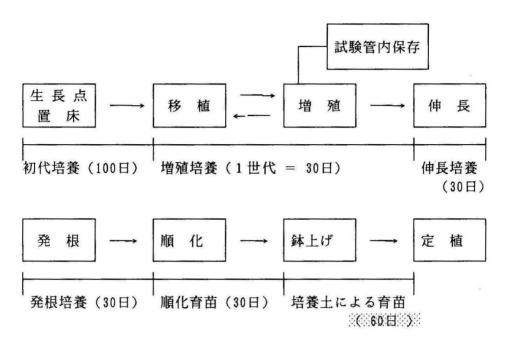
[結果] 培養の結果に基づき下記の培養システムが考察された.

本培養システムは、増殖培養を5世代反復することにより1本の茎頂から 340 日で約 600 本の組織培養苗が作出できる。また、試験管内保存を行なう ことで需要に応じて常に組織培養苗を得ることができる。

今後、組織培養によるウィルスフリー化、特定検定についての検討を加え、 特にウリミバエ根絶後の沖縄のパパイヤ産業の発展に寄与したい.

## 参考論文

- 1) 片岡 郁雄 · 井上 宏 園芸学会要旨集(昭和63年春) P 52
- 2) LITZ, R. E and CONOVER, R. A Hort Science (1978) 13 P 241~242
- 3) MEDHI, A. A and HOGANL Hort Science (1976) 11 P 311



中	<b>州学B</b>	,	_	_	1303+	(1-11/14)	11月19日	
		 	100					
_								